

者が続出しました。この航海の前、北海道より内地に大豆を積んだそうで船底に多くこぼれていました。始めは何とも思わなかったのですが、どうも目が痛い。それが全員です。二日位すると目がかすんで良く見えない。全員礬酸で目をたたいて、船室の中へ入らないようにしていた。小笠原あたりから見えるようになりやれやれと安心しました。

十月十九日、浦賀帰港、召集解除。直ちに貨物列車で横須賀出発。思い出の地・西条、八本松間は列車不通のため各自荷物を担いで歩いていると、地方人が兵隊さんご苦労でした荷物を持ちましようというので親切にと御願いましたが、荷物を受け取る時に十円要求されましたのには驚きました。

南鳥島では金を使うことはないので、全額送金していましたが家に届いていない。世話部に行つて見たが判らず終いです。一年半喰わずのただ奉公に終わりました。

## 若き日の追憶

岡山県 大森 学

### 再度召集令状

支那事変から召集解除になったのが、昭和十六年五月であった。母は、私の出征中の二年間、雨の日も、風の日も、一日も欠かさず五時に起きて三キロある氏神様に、武運長久を祈願してくれたことを、帰つてから聞いた。

今度帰ったら、どうやって母を安心させてやろうか、そんなことを思いながら、元の会社「株式会社藤田組・棚原鉱山」へ復職し、前沢参謀の命を守り銃後の戦士として活躍を誓った。

帰還後半年が経過した。十月には東条内閣が成立したが、米国との関係は悪化するばかりで、ついに十二月八日、暗黒の大東亜戦争に突入したのであった。

いっお召しがあるか分からない情勢の中、大阪の本

社へ転勤を命ぜられた。今度こそ母と一緒に住めるとの思惑は完全に外れてしまった。また、母を一人にして大阪へ単身赴任した。

昭和十七年後半になり、戦況は次第におかしくなってきた。三月に艦載機が神戸を初空襲した。その時は敵はやるなあ、ぐらいいに思っていた。ところが六月にミッドウェー海戦で海軍が大打撃を被ったのであった。八月には米軍がガダルカナル島に上陸した。私のいる大阪も三日に明けず空襲の洗礼を受けるようになった。その時私に「徴用令」が来た。徴用令とは強制的に軍需工場で働かされる制度である。私は鉱山の会社へ勤めていたので、大阪鉱山監督局の証明で免除された。かくして、とうとう私に二回目の召集令状が来たのであった。

#### 『充員召集令状』

昭和十八年三月三十日ニ岡山中部第四十八部隊

#### ニ入隊スベシ』

であった。

入隊の日は雨だった

私の入隊の日は雨だった。奉公袋を提げて岡山の練兵場へ集合したのが昭和十八年三月三十日であった。私の所属はやはり通信中隊であった。旅団通信の仲間も数人いたし、野戦下番の古兵ということで怖いものなしであった。

入隊して分かったのであるが、今回の動員は大動員で一度に二個連隊が入隊したのであった。兵舎の内部を改造して寝台をはうり出し、二階を造った。

「百五十四連隊要員」と「百五十四連隊補充隊要員」であった。三月はまだ寒い。にもかかわらず前者は夏衣袴が支給された。後者は冬衣袴であった。夏組は南方行きだと、誰もがすぐ感づいたのであった。

そのとおり夏服組は数日後、日本原へ出発し、そこで態勢を整えて逐次南方戦線へ出動していった。ビルマ派遣軍、軍略号「兵第一〇一四部隊」である。私たちは、その部隊の補充隊として、新たに入隊して来る初年兵の教育訓練に当たることになった。

ラッパで起床・ラッパで消灯

四年ぶりにラッパで起床、ラッパで就寝する生活が

始まった。ビクビクしながら過ごした四年前の姫路連隊とは雲泥の差で、毎日毎日偉そうなことを言っておれば日が立っていた。

三か月毎に入隊してくる初年兵を教育するのが、補充隊の任務である。私も今度は軍隊の裏も表も熟知している筈である。怖いものはなにもなく、上司にも部下にも至極冷静に接することができたと思っている。

ただ戦局が思わしくないので、外出には一切禁止の命令が出されていた。私は事務所勤務だったから適当に用事をつくって、公用証でシャバの空気を吸っていた。

私たち古兵は、時々粟井准尉を引っ張り出しては、「手旗」で格好をつけ、三野公園に息抜きに行ったものだ。

ある日、三野公園下の旭川堤防で休憩していたところ、凄い地震があった。後で分かったのだが、鳥取の大地震だったのだ。支那事変に一緒だった第四十連隊の連中から戦友会の時に聞いたのだが、すごい地震で、鳥取の市街地がメチャメチャになり、鳥取連隊が復旧

に出動したそうだが、時期が時期だけに「極秘」にして新聞は見出しを小さくしていたそうだ。

佐々木の聯さん

私の隊は、「岡山中部第四十八部隊・桐畑隊」と呼ぶが、正式には「第百五十四連隊補充隊・通信中隊」と言う。

部隊長は佐々木中佐であった。兵隊から少尉候補者の、たたきあげの凄くユニークな部隊長であった。

兵隊たちは「レンさん」とか「ブウさん」とか呼んで、なにか親しみの持てるユニークな部隊長であった。

その「聯さん」は家族を広島に残し、単身で兵営の近くに住んでいた。聯さんは常に、不眠・不休・不食主義をとなえ、なお冬は裸になれ、夏は服を着る、で心身の鍛錬を指導した。

時々、冬の点呼前に上半身素裸で竹刀を持って営門をくぐる。先ずびっくりするのは衛兵司令である。兵舎に行くのであるから二番目に驚くのが不寝番である。そして三番目にたまげるのが古兵たちなのである。兵舎に着くなり不寝番に大きな声をするなど云い聞かせ、

お前の寝台はどこか、不寝番に立っている兵隊の毛布の中にもぐり込むのである。

やがて起床ラッパが鳴る。初年兵は間発をいれずに起床するが、古兵は中々毛布から出ない。そこで聯さんのシナイが飛ぶ「こらっ起きんか」隣に寝ていたのは連隊長であったのだ。

こんなこともあった。夏の夕食後、古兵たちは酒保に集まってだぼらを吹かしていた。そこへ聯さんが乗馬で巡視に来た。酒保係の頼宮少尉にうどんを注文し、これは美味しい、もう一杯と云って馬上でうどんを二杯たいらげた。

中隊長同士の銃剣術の試合を、兵隊の目前で行い、見せた。審判は勿論聯さんである。これには中隊長も参っていたようだ。

私の隊には中支派遣軍で一緒だった、津村・青山・吉田・富田の諸君もいて心強かった。

戦況は次第に悪化し、四月には山本連合艦隊司令長官が戦死された。五月にはアツ島守備隊の全滅が報ぜられた。佐々木部隊長は約二千人の兵隊を営庭に集

め、今ここにいる全員がアツ島では玉砕したのだ。お前達は、ますます訓練に励み聖旨に応えなければならぬ。と強い口調で訓示した。

#### 青山上等兵との決別

間もなく正月という、昭和十八年の師走の夕方、青山上等兵以下十名が、第五百五十四連隊通信隊に配属を命ぜられ出発した。「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君の辺にこそ死なぬ、願みはせじ」と、歌い見送った。

数日後、青山君たちの乗った船が台湾沖で敵の魚雷にやられたらしい、との情報が流れた。間違いであってほしいと思っていたが、その後ようとして消息は不明のままだった。戦後岡山県の戦死者名簿を調査したところ、青山兵長は昭和十八年十二月南方洋上にて戦死となっていた。残念ながら噂が現実だった。

青山君とは支那事変の時も一緒に、中支戦線を行動を共にした同年兵であった。彼は徴集延期をしていたので、私よりは三歳くらい大きかった。朝日新聞の記者をしていたとか、初年兵のときから二年兵を煙にま

くほどの大物で、通信隊の人気者でもあり、名物男でもあった。

### 軍服で迎える三回目の正月

昭和十五年と十六年の正月は中支で迎えた。十九年は岡山の兵營で迎えることになった。東条首相兼陸相が参謀総長も兼務することになった。ついに米軍がサイパン島に上陸し、地方人も含め玉砕が報ぜられた。戦況はおして知るべしである。

私の所属する中部第四十八部隊・通信中隊は、隊長が桐畑中尉、隊付に高田中尉、粟井准尉、三宅准尉、張り切り見習士官が二人、大本、島谷、幹部はこのような構成であった。二人の見習士官を除いて、将校、下士官、兵にいたるほとんどが戦争経験者であった。次から次へと入隊してくる初年兵の教育は、もっぱら大本、島谷。二人の見習士官の受け持ちであった。

三宅准尉は負傷して野戦不適であった。高田中尉と粟井准尉は高齢。もうこの頃になると将校も兵隊も程度が落ちたのも無理はなかった。

私等補充兵は、平時であれば兵隊なんかに行くこと

はなかった筈だ。

私は木村曹長の助手として事務所勤務であった。曹長の主な仕事は、連隊本部の命令、会報の受領と給与全般である。給与とは毎月一回の給料支払いだ。早出も残業もないので簡単なものである。もう一つの給与は毎日三度の食事である。従って朝・昼・晩の人員を正確に掌握していなければならない。例えば朝百名でも、携行食持ちで演習に出掛ける兵隊が三十名いれば、朝百三十名分受領していなければならない。昼は結局七十名でいいことになる。

予定外の兵が急に増えた時など、少数であれば、皆で分けあって食べることもある。このような行為を軍隊用語で「残飯給与」という。

連隊本部に出す日報を書くのが私の大事な日課であった。

あのころ木村曹長は三十三歳、私は二十五歳であった。木村さんは現役で岡山の十連隊に入隊し、満州事変に出動して金鷄勳章をもらっておられた。神戸の川崎製鉄に勤務していた。隊の事務には格別精通してお

られ、もう一人事務に詳しい被服係の戸田軍曹とよく相談しながら、通信隊を切り回していたように思う。

私と木村曹長とは八ッも年が違う。長男と末っ子ぐらいだ。いつも弟のようにかまってもらっていた。大森も上等兵が長いからといって、三宅准尉と相談して、一べんに曹長にはできんからといって、兵長にしてくれたのも、木村曹長だと思っている。

昭和十九年になってから、現地入隊のかなり年をとった補充兵が入隊してきた。ある時三十五から四十歳ぐらいの大阪出身の未教育補充兵が入隊してきた。兵舎に収容しきれないので、市内のお寺を借りて収容し、現地からの初年兵受領員に渡すまでの事務処理に多忙であった。が毎日木村曹長の随行で街に出られるのが楽しみであった。

特にその頃「私的制裁絶対禁止」の厳命があり、未教育兵の目にあまる行為に対し、はがゆい思いがしたものだ。

再び召集解除になる

昭和十九年になると資源節約のため、新聞の夕刊が

廃止になり、国鉄の一等車・寝台車・食堂車も廃止になった。四八の酒保に行っても甘いものは中々買えない。うどんぐらいで我慢しなければならなかった。

サイパン島が米軍の手に落ちてから、本土空襲の頻度は増してきた。岡山でも時々警報が発令された。その都度、機関銃中隊が自動砲を持って京山山頂と内山下国民学校屋上へ配備についた。水島と玉野には常時一個小隊が配備されていた。通信隊はそれぞれ二、三名をそれらの隊に配属していた。

教育係の古兵たちも、逐次新旧交代が行われていた。「種とりの召集解除じゃ」といって喜んで帰っていたのは菅野上等兵だった。彼は明けても暮れても母ちゃんのことしか言わなかった。

私のようなチョンガーにもついに交代の順番が来た。昭和十九年五月五日召集解除を命ぜられ、社会復帰することになった。

今回の召集解除は菅野上等兵の言うとおり、種とりの召集解除としか考えられなかった。応召前は大阪の本社に勤務していたが、応召中に本社が東京に移転し

ていた。私の希望は岡山の榎原鉦山に復職したかったが、会長の鶴の一声で大坂勤務、しかも子会社の海軍の軍需工場である豊崎伸鏑所に向向を命ぜられた。大坂では独身寮の寮長を仰せつけられていた。

その頃の大阪は、毎日のようにB29の攻撃に見舞われた。私は会社はほっておいて夙川のお屋敷へぶっ飛ばすのであった。ところが阪急電車の武庫川・園田あたりで何時も空襲警報にかわり、電車はストップした。それでも昭和二十年の正月は備前の我が家で、久しぶりに母と二人水入らずの正月を迎えることができた。その時、ちらっと来年は我が家で餅は食べられないのではないか、そのような予感がした。

### 三回目の召集令状

昭和二十年三月二十六日、臨時召集により、広島師管区歩兵第五部隊（岡山）に入隊、同日付。歩兵第四四七連隊に配属になった。

前年五月に召集解除になったばかりで、シャバにいたのが丁度十か月で、三度軍服を着る羽目になった。戦局は極度に悪化していたので、今度こそは生きては

帰れないと覚悟を決めた次第であった。

入隊して見ると、連隊長は十か月前の佐々木部隊長であったが、大佐になっておられた。そして私はやはり通信中隊の所属であった。私たちが入隊したときは既に、佐々木部隊長は宮中に参内し軍旗を親授しており、連隊本部に安置してあった。

部隊は早速編成に取りかかった。通信隊長は貝原中尉であった。早速部隊編成にかかり、私は第一小隊第一分隊の先任兵長で川崎分隊長を補佐する役であった。私の下に加藤上等兵と山本一等兵がいた。二人とも私より五歳も六歳も年上であったが、よく協力してくれた。分隊長の川崎軍曹は年は三十五、六歳で満州事変下番で、若い小隊長クラスには一歩も譲らぬモサであった。小野田兒子という現役の一等兵はしっかり者で、私の分隊をリードしていた。その他は入隊したばかりの二等兵で、アイウエオ順に編成したのか、有原・有本・浅野・阿部と「ア」の付く者ばかりであった。この師団の防諜名を「護路兵団」と云う、あまり語呂はよくない。国土決戦部隊であった。既に沖繩は米

軍の手に落ち、軍は本土決戦を覚悟していたようであつた。

#### 護路兵団新任務につく

我々の護路兵団は四月中旬編成完結し、九州方面へ向け出発。鹿児島県川内市に一時駐留し、同地で一月にわたる猛訓練を実施した。川内市では、地元の各種団体の催す慰勞会などで大歓迎を受けたご恩は今でも忘れない。

我々の通信隊は、最初、川内高等女学校を宿舍にしていた。びっくりしたのは女子生徒の半分くらいは、「はだし」で通学するのであつた。校舎の入口にバケツと雑巾が置いてあつて、バケツに片足ずつ突っ込み雑巾の上でビチャビチャとやつて廊下へ上がるのである。鹿児島は暖かいせもあるが、まだ五月である。いかに節約に加え物資も不足していたかの証明である。今の世代の人に聞かせてやりたい。

#### 護路兵団目的地に到着

そして五月末、鹿児島本線から日豊線に乗り換え、着いた処が宮崎県高鍋町であつた。いわゆる日向灘で

ある。早速兵舎の建築であるが、兵舎といつても山の松林の中に造る三角兵舎である。もう沖繩が米軍の手に落ちていたので、毎日のようにグラマンがやって来る。生意気にもパイロットの顔が見えるくらいの超低空で我々の頭上に現れるのである。

素人大工ばかりで造る兵舎だが、頭数がものをいつて瞬くうちに完成させた。さあこれからは穴掘りだ、各分隊に別れての競争が始まった。山の中腹に鉱山の坑道のような穴を掘るのである。即ち五メートル直進して、横へ直角に五メートル掘る。また直進で十メートル進む。それを何本も掘つて中で連結するのである。戦後の米軍の発表によればこの付近が一番最初の上陸予定地だつたそうだ。

第一分隊長は年寄りだから、専ら私が分隊長代理をやつていた。近代作業具はなく、ただ「十字鍬」(ツルハシ)と「円匙」(スコップ)だけで掘るのだから大変である。兵隊の手は可哀相に豆だらけだつた。結局七、八メートル掘進したとき終戦になつたと思う。

掘つた土を外へ出すので、敵機に見られないように、



毎日新しい樹木を切っては差し、切っては差ししてカムフラージュに努めた。

### 穴掘りと空襲

我々の隊は通信中隊であるが、今はもう通信のことなんかそっちのけ、明けても暮れても穴掘りの毎日であった。兵隊たちは労働が厳しくてまいったと云っているのではない。飯の量が足りないのである。ある日こんなことがあった。兵隊たちが三角兵舎から作業現場に通う道中にカボチャがなっているのを知っている。取って来ていいですか、私も一瞬とまどったが、よし、取ってこい、絶対に見つかるな。そして壕の中で飯盒で煮て食べた。能率の上がることできめんであった。兵隊は決しておいしい物を食べようなんて思っていないかった。全く質より量であったのだ。穴掘り作業は二十四時間休みなしに続けられた。兵隊は作業のないときは三角兵舎で寝ていた。

空襲といってもB29とちがってグラマンのは機銃掃射であるから、まるで戦闘をしているような状況であった。応戦する友軍機を見たことはなかった。

時々爆撃機の来襲もあった。七月になってから、或る日米軍機からビラが撒かれた。ビラは写真入りで、沖繩を占領した米兵が子供に牛乳を与えている。そして例によって戦争は日本の軍閥と財閥がしているので、兵隊さんには罪はない。早く止めて家族の元へ帰りなさい。であった。岡山の母から手紙が来た。六月二十九日にB29によって岡山市は丸焼けにされたとのことであった。

### 戦局はいよいよ逼迫

昨年東条内閣が総辞職して、その後を受けた小磯内閣も一年も持たずに鈴木内閣に変わり、本土決戦のための非常立法ができた。

私たちは、そんなことは一切関係なし。ただただ穴掘りに専念するのみであった。私達は通信隊の特権で夜間集まっては短波放送を受信していた。いわゆるアメリカの攪乱放送である。

こちらはサイパン放送局です。「日本の兵隊さん、沖繩には平和が戻っています。皆さんは無駄な戦争はもうやめて家族の元へ帰りなさい。今日は懐かしいメ

ロディーをお聞かせします。」渡辺はまこの「忘れちゃあいやよ」このような平和時代の歌謡曲を放送したかと思うと、支那派遣軍総司令官・岡村大將を岡村中將と言ったり、随分と間違った放送もしていたように思う。私達は内緒でこの米軍放送を傍受していた。

私達は日本にいながら、新聞を見ることもない。が、各都市がB29により爆撃されているくらいは分かっていた。ところが八月になってから、広島に新型爆弾が落とされたと言う情報が流れた。だが、そんなに気にもならなかった。が、ある日、米軍の短波放送が、ソ連軍が満州に進攻して山田関東軍司令官が降伏した。私たちは、そんな馬鹿なことがあるもんか、と、一笑にふしてはいたものの、本土決戦近しの子感がしないでもなかった。

#### ついに玉音放送

私たちは相変わらず不眠不休で穴掘り作業に従事していたが、今日にかぎり朝から作業は中止、そして正午には三角兵舎に集合せよ、とのことであった。皆ただならぬことが起きた、くらしい予感は誰もしていた。

各部隊には、本日重大放送があると、早朝から予告されていたのだ。我が通信中隊も全員三角兵舎に集合した。

時に昭和二十年（一九四五年）八月十五日正午に、歴史的な玉音放送をきいた。天皇の高い、細い声を、国民がきいたのは、日本史上はじめてのことであった。その言葉は、誇張され、堅苦しく、また「降伏」という語はどこにもつかわれていなかった。実際そのとき私たちは、本当に戦争に負けて降伏したのかなあ、疑心暗鬼、理解しかねた。

ラジオが悪かったのか、雑音がとても多くて不明瞭であったことは確かであった。しかし放送が終わると同時に、貝原中隊長の目から熱い涙がポトリと流れた。兵隊たちもただ呆然としていた。そして中隊全員の前で、中隊長は我々の働きが足りなかったために、陛下にご心配をかける結果となった。誠に申し訳ない次第である。今日はこれから全員謹慎せよ、との命令がくだされたのであった。

誇りたかく、愛国心のつよい兵隊たちも、終戦の詔

勅を聞き、それが事実であることを知ったとき、私たちの心は混乱した。しかし若い兵隊たちは、敵しい穴掘りからの開放がなによりの救いであったようである。

終戦から復員まで

陛下の玉音放送から一夜明けた三角兵舎は、みな呆然としていた。要塞の壕掘りから開放された若い兵隊たちは、何かほっとしているようでもあった。

日朝点呼も、軍人勅諭の奉唱も何時ものとおりに行われた。幹部の人は連隊本部に呼ばれそれぞれ指示をされたようであった。

連隊本部では連隊旗の奉焼がなされた。私たちは軍に関する一切の書類（軍隊手帳・典範令集・通信関係書類等）を広場で焼却した。進駐軍が上陸してきたら兵器類を渡さなければならぬので、それまでに小銃に刻印されている菊の紋章を、ヤスリで削りとる作業に着手した。なかなか削れないので、結局ベケの字を入れることで勘弁してもらうことになった。

菊の紋章の付いたまま、かつての敵軍に兵器を手交することは、天皇陛下に対し申し訳ない、と云うこと

であった。

復員の命令があるまでは、そのまま待機しておれと、云うことであつたのであろう。一番嬉しかったのは終戦の翌日からは、麦飯に変わったこととこれまで貯蔵していた食糧は食ってしまえ、であつた。

そして、いよいよ復員の命令が下つた。九月十日出発して一路岡山へ、途中広島駅で汽車が停車した。見渡す限り焼け野原、そのとき私たちはまだ原子爆弾ということは何も知らなかつた。

九月十一日正午岡山駅に到着、駅前広場で解散式をしてそれぞれ家路にいたのであつた。岡山の街も丸焼けであつた。